

## 名誉教授 森田昌幸先生 最終講義 国際紛争をなくすために

司会者 では、ご講義をお願いいたします<sup>(1)</sup>。

森田先生 はい、わかりました。マイクはなくても聞こえますね。

今、ほぼ12時近いです。柳沢教授からは60分から90分の講義を、と言い渡されておりますが、私にはそれだけの力がございません。実はあるのですけれども、90分を超えたら、皆さんもう頭に来ると思いますから。だいたい5月に学会発表をしたときの内容を少しサマライズしたものをですね、30分ばかりお話していきます。要点だけで、長々と説明する必要はないと思います。皆さん、もうわかっていることですから。

そうは言っても、一生懸命に書いてきたのです。これを1からやったらおそらく暴動が起きますから、「やめろー」とね。誰がやめろと言うのかも予想がついているのですが、30分ばかりちょっと要点だけをお話して、お話は終了とします。私の方こそ、皆さん方の近況を是非、お聞きしたいと思います。なんだ、せっかく出てきたのに30分で終わるのかと思うかもしれませんが、そういう意味でありますので、ご了承ください。

私が大学に入って本格的に研究活動を始めたときの動機、これは実は皆さんに講義の中であまり話したことがないんです。なぜかという、個人的なことが絡んでいましたので、まだ若い18—19歳から22—23歳の人に、そう個人的なことを話すべきものではないと思っていたからです。お話していないから、今日これから話すことにはあまり知らないことがあるかもしれませんが、それが大きな動機になっていたのです。それを3分ばかりお話し、本論に入ります。

\* \* \*

私は子どもの頃から戦争というものが本当に怖くて、この中には戦争経験者はおそらく一人もいないのですが、私は子どもながらに経験をして、怖い思いをしておったものです。なんとか戦争をやめることができなかつとずっと考えてきました。大学に入って、さらに大学院も博士課程5年間を考え抜きました。さらに城西大学に来て、いよいよ本格的に研究費をいただいて研究活動をする中で、どうやって戦争をなくすかに取り組んできました。この動機、子どもながらに何故そんな動機を持ったかという、それは私の父と関係しています。

私は1939年生まれです。現在の城西大学の学長兼理事長をしている藤野という先生と、この間ここでお会いしました。彼はちょうど1949年生まれで、ちょうど私と10歳違いです。その方とその話をしていたら「知らない」と言います。なぜかという、1949年というのはもう戦争

が終わっているんですね。私たちの世代はもうそんな境目もわからないような昔の人間なんです。若い皆さんにはちょっと抵抗があるかもしれませんが、まあ3分で終わりますから。

私の父は地方の小さな町の旧制中学の教員をしていました。陸軍士官学校や海軍兵学校なんて行っていない。普通の文系の学校を出て、万葉集の研究をやっていたんです。そこへ突然、召集令状が来まして、激戦中の激戦の沖縄の最前線に行け、と言われたわけです。昭和19年、戦争が終わりに近づいている。もちろんそのときはわかりませんよ、みんな勝つ気でやっているのですから。しかし年表をみると、もう終わりに近づいている。負け戦ばかり。新潟県長岡出身の山本五十六長官も、もうそのときには亡くなっている。

そういうときに私の父に召集令状が来て、最前線に行け、と。おそらく誰も知らないと思いますが、南大東島・北大東島・沖大東島という、いまNHKの天気予報で沖縄の端っこの方にちょっとだけ出てくるんですね、そういうところに行かされました。そして年齢は28歳か29歳だったと思います。いまの皆さんより年齢は若いと思います。その父がいきなり陸軍中尉になり、予備役から現役に復帰させられて、いきなり陸軍中尉として、部下350名を率いて出撃せよ、と。しかもサイパン、テニアン以上に厳しい命令で、死ねという命令なんです。玉碎命令を受けて、生きて帰れないんです。

そのとき私は、長崎県に佐世保というところがありまして、日本海軍の本拠地・基地ですが、そこに見送りに行ったのです。本当はこれ軍律違反だと思いますが、父の寝台車に私はこっそり入れてもらって、父と小さな狭い寝台車の中で一緒に寝ました。それを今でも覚えています。私が5歳のときです。そしていよいよ、長崎県の佐世保の軍港、そこに佐世保鎮守府というのがあります、日本海軍の軍港にもう護衛艦が接岸していて、それに乗っていくわけです。そのいよいよというときになって、私は何を思ったのか、「お父さん行かないで」と父にしがみつきました。ちょうど父の腰に下げた拳銃のホルスターに、頬がガンとあたって痛い思いをしたのを覚えています。たちどころに警備の憲兵に引き離されまして、私は半泣きになりながら、父を見送ったのを覚えています。そのとき父が、「じゃあ、昌幸、お父さんはこれから遠いところに行くけれども、すぐ帰ってくるから、しっかり勉強するんだよ」と。

いいですか、28歳や29歳の若者が死の旅に出るとき、わが息子にそういうことを言えるか。私はのち28—29歳になったときにそれを思い出しました。到底、自分ではそう言えない、父の覚悟は相当につらかったのではないかと、思いました。そんなことから、戦争は二度としないと思うに至りました。

父はいよいよ護衛艦に乗るとき、何を思ったかクルリと私の方を振り向いて、自分の子どもに対しいきなり敬礼をし、回れ右をして去っていきました。これが、私が父親を見送った最後でした。こういうことから、5歳の子どもながらに、戦争だけはしてはいけない、と、思いました。

\* \* \*

5月の学会のときにもこの話をしたのですが、私は、戦争が非常に怖いんです。その何が怖い

かという、死ぬ間際が怖いんです。よく戦争映画とかをみると、皆、鉄砲の弾や大砲の弾にあたってワーと死ぬけれど、ああいう死にはむしろ即死で、それは怖くありません。私知ってるのは、皆、呼吸困難で息ができなくて死ぬんです。これは相当につらいと思います。即死なんて、アッという間ですから怖くない。息ができなくて、耐えに耐えて死ぬのは怖い。こういう死に方だけ、戦争では一番それが多いのですから、なくしていかなければならない。ここから戦争をいかにしてなくすか、という勉強をはじめました。

「こういうテーマで、これからやっていきます」と私の指導教授、恩師に申しあげたら、「森田君、それは無理だよ、戦争はいつの世にもあるし、そんなものを簡単にやめるなんて無理だよ。だけど、どうしてもやりたいと言うなら、やってみたまえ」。こう言われたんで、今日に及んだんです。

先ほどの柳沢教授の説明にもありましたけれど、この5月25日の土曜日に、日本政治法律学会から表彰を受けたとき、私はその学会の会員でもありませんし、なんの縁もないのに、なんで呼び出されて表彰状をもらうのか、と思いました。そのとき担当の芦立という、割と珍しい苗字の教授、京都産業大学の教授で、まだ皆さんくらいの若い先生ですが、その人に聞きました。そうしたら、「先生は誰もやらないような、戦争はどうしたらやめられるかということを」、「なかなか効果がでないのになさってきた」と仰いました。効果がでないのにやってきた、そのことに対する表彰である。なるほどそうか、誰もやらないから少し褒めてやる。そういう意味だと思って、ありがたく了解をしたのです。でも、いまだに、どうやって戦争をやめるかわかりません。

そんなことから私の研究生生活が始まったのです。だから、皆、懐かしいあなたの方にかつて坂戸キャンパスで会ったときには、そういう背景がありました。けれども、授業ではそういうことはほとんどしゃべっていないと思います。ごく当たり前の政治学の教科書にあるようなことを話してきたと思います。

ただ、私の授業をとってくれた人のリアクションを直接に声で聞いたり、あるいは答案の裏に書いてあったり、投書にあったりしたことから類推解釈すると、森田という先生は、人が言わないことを平気でズケズケ言う、それが面白いから聞きに来ているんだ、ぜひ続けろ、と。しかし今はもう、それができないのです。それをやりますと、教室には録音をしている学生がたくさんいますし、たちどころに、あちこち垂れ込まれて、注意を受けるのです。そしてお灸を据えられる。場合によっては、辞表を出せと言われる。

今日も実はウチで「非常に注意するように」という注意を受けて参りました。なんとなく私の授業をとってくれた皆さんからみると、私のいまのしゃべり方はぎこちないんじゃないかと思うんですね。これはブレーキがかかっているんですね。あれを言っちゃいかん、これも言っちゃいかん。そういうことを言われますと、私はしゃべることがないんですね。だけど、まあ、そこを乗り越えてお話ししようと思っています。

\* \* \*

日本ほど平和な国はないと思います。そう思いませんか。テレビ番組について、これも用心しと言いますけれども、昔式に言うと馬鹿げたテレビですね、今はそう言うてはいけなから、非常に楽しいテレビがいっぱい放映されています。あんなテレビが一日中放映されている国は滅多にないんです。自由が溢れきっているのですが、それは本当の自由ではないと思っています。例をあげてもいいです。

去年でしたか、なくなりましたけれど、渋谷の交差点で新年を迎えるために、イチ・ニ・サンと数えて、「あと5秒」、「あと4秒」、「ワーッ」と、酒を飲んで騒ぐ。たしか、あれは廃止になりましたよね。ああいうことをやっている国は、世界中にないです。

この間、あのトランプさんが撃たれましたよね。あの場面、皆さん、テレビでご覧になったと思いますけど。トランプを撃った男、高性能ライフルで耳をかすめてますよね。あと5センチ、トランプさんがちょっと動いたら、頭蓋骨を貫通して即死だったと思います。あれ、日本の警察官ならどうしますか。この中に警察官の方もいらっしゃると思います。

私と割りと学生時代によく話をした皆川さんという栃木県警の警察官、今日はなんか秋祭りの特別警備でどうしても来れないという連絡を得ていますが、この中に警察官の方がいると思います。日本の警察官に聞きたいんですが、どうしますか。捕まえようとするでしょう。あれはどうですか。12秒後に射殺していますよ、大統領護衛部隊、シークレット・サービスが。トランプさんが耳をかすめた瞬間から12秒後に射殺されています。逮捕されていないです。身柄確保なんてやらないんです。殺すんです。これ、非常に能率的なんです。これもちょっと用心して申し上げますけれども、まず捕まえて、留置して、裁判にかける。その間、被疑者に対して食事を与える。食事代がかかる、お金がかかるんです。3年も5年も食事をしている麻原という被告人がいましたよね、死刑になりましたが。何年も食事をさせているんです。

アメリカでは、おおやけには言いませんけれども、アメリカ・ニューヨーク市警の警官から直に聞きましたけど、銃口を向けた場合は射殺していいんです。日本の警察官職務執行法では、空に向けて撃つ。場合によっては、地面に。地面もコンクリートの地面は跳ね返るから、コンクリートの地面に向かって撃っていけない。撃った薬莖を全部拾って、その数を届け出なければならない。第一、警官の持っているピストルの規模が違うじゃないですか。ニューヨーク市警の警官の45口径の拳銃を持たせてもらいましたが、すごく重いんです。日本のスミス&ウェッソンという6連発は、軽い。ここが違うんです。

87歳の爺さんが、歩道にいた若いお母さんと子どもを跳ね飛ばして3人、死なしましたね、はっきり言ったら殺したようなもんです。禁錮5年じゃないですか。3人死んでいるんです。禁錮5年、こんなバカな話がありますか。これ以上は、もう言うのはやめます。

ということで、日本は非常に平和なんです。私、平和に文句を言っているのではないんです。平和ほど良いことはないんです。問題はこれをどうやって長持ちさせるかです。皆さん、考えて下さい。この平和をどうやって維持していくか。渋谷駅のバカ騒ぎをいくらやってもいいんです、人に迷惑をかけないなら。ただ、この平和をどやって守っていくか、どう維持していくか、

このところをもう少し考えましょう。

\* \* \*

ということで、本論はここにありますが、皆さん、みんな知っています。どういうことかというのと、第一次大戦の結果、第二次大戦が起こった。第二次大戦後、米ソ対立が起こった。カリブ海でフルシチョフとケネディーがやりあった。一触即発だったけれど、フルシチョフが我慢した。皆、帰って行ってよかった。まあ、こんな話ですから。今ので、もうあとこれは省略しますが、こういう話は皆さん、知っているわけです。ほぼ、結論の部分を上申したいんですけど、4つあるんです。

まず一番に、ですね。ここは黒板、書けるのかな？

司会者 はい

森田先生 (板書) やっぱり白墨の方がいいですね。これ、滑りすぎて書けない (笑)。

戦争をなくすための手段の一番は、法の支配です。これ、よく黒板に書きましたよね。ルール・オブ・ロー。国際社会のですよ、国内はもう行われていますから。まずこれをどうやって確立するか。国際社会における法の支配です。

この8月15日の前後、NHKが夜中の12時—1時頃、B29による東京爆撃というのをテレビで流していました。私は見ましたが、あれ、どう思いますか。戦時国際法違反でしょう。なんの関係もない東京市民を皆殺しにした。焼き殺したんです。しかも原爆も落としているんです。東京裁判、極東国際軍事法廷で、なんの問題にもされていないんです。こんなバカな話ないんですよ。

私はハワイのヒッカム空軍基地、アメリカの第5航空軍のヒッカム基地に花束を持って行きました。アメリカ兵万歳ではないんです。花束を持って行かないと射殺される可能性がある。花束を抱えて、ワイキキの海岸からタクシーに乗って行って、花束をこうやったら、衛兵が“Attention!”と叫んで、私に敬礼しましたよ。花束を置いて、そのときに、私は「日本人で、ここで亡くなった人の霊を慰めに来た」と言ったら、「お前、よく来た」と言ってくれました。私は内心ドキドキ、いつ殺されるかと思いつつ、ハワイのホテルに戻りました。それをいま思い出しています。

一歩日本国内を出ると、そういう状況ではないですか。皆さんも海外に行っているでしょう。ひどい目に遭った人もいると思うのです。法の支配が行われていません、海外では。日本国内以外では。これをどうやって確立するか、これが非常に大きな問題なんです。

それからもう1つは、この日本国民も考えなければならないけれど。

(司会者にパンを示しながら) これ、書けなくなっちゃった。これ、開けたままではいけないんだな。すみません。蓋を持っておきます。白墨の方が楽だね。(板書)

国家権力の発動としての戦争を永遠に禁止する。ただそれを口で言っているだけではなく、これを法文化する。2番目に、なんとしても達成しなければいけません。

途中ですけれど、誤解しないで下さい。軍事力を要らないと言っているわけではない。むしろ逆なんです。必要なんです。皆さん、夜に寝るとき戸締りをするでしょう。開けっ放しだったら泥棒が入ってきます。これはダメです。だから、力に向かって来る奴には、力で、来たらどうい風になるかを示しておかないといけない。

(チャラチャラと携帯の着信音) あっ、これ、私のだ。すみませんね。変なのがいっぱいきますよね。

国家権力の発動としての戦争を永久に禁止するというのを、きちんと謳わなければいかん。

それから3番目に、平和維持を目的とした国際警察機構です。これをきちんと作らなければいけない。国連にもあるではないかと言うかもしれませんが、国連はもうダメなのです、あとで言いますけれども。国際の平和です、平和維持機構としての警察機構ですね。覚えておいて下さい。警察というのは、お巡りさんの警察とはちっと意味が違います。警察行動という意味での警察です。国際警察権力、これを作る。

国連憲章第42条1項で、国連は武力行使をできる。しかし、皆さんご存じのように、国連の常任理事国に中国が入っています。ソ連・ロシアが入っています。それが当事国になったらどうなりますか。これは子どもが考えてもわかります。現に当事国になっているんですから、いまロシアが、プーチンさんが。だから国連憲章第42条1項は使えないんです。国連警察軍を出せない。

それから4番目ですね、これは日本のとくに政府、なかでも自民党の代議士たちに考えて欲しいんですが、ちょっと書けませんので(板書)。戦争を挑発する行為ですね、これはいろいろな形があると思います。この挑発行為を国内法で禁止する。挑発行為を禁止する。これまた、どのような行為が挑発行為になるかは難しい問題になりますけれども、それは裁判所が決めるでしょう。戦争の挑発行為を、刑事罰をもって禁止する。

この4つが、私が50年間かけて考えたことです。50年でたったこれだけか、と仰るかもしれませんが。まあ、いろいろ考えた結果、こういうことを実現した場合には、戦争はほぼ地球上からなくなるでしょう。逆に言うと、いま、これはないんです。あっても、国連憲章みたいになっています。だって戦争をやめろという側のなかに、それをやっている奴がいるんです。これは無理です。

\* \* \*

こういうことを、どうやってやっていくか。これから先は、もう私ではないんです。皆さん、日本国民です。

そのヒントを1つだけ申し上げますと、これは代議士先生に言ってもなかなか無理です。元国会議員の先生が、いまここにいらっしゃいます。城西大学副学長をなさっている倉成教授です。倉成先生をお願いしたいけれども、まあともかく、政治家の人たちもなかなかやってくれない。

最終的に、これをどこで、どうやって決めるか。私がいろいろ考えた結果、結論は一人一人の

国民が、心のなかに戦争をやめようという気持ちをもつことです。この気持ちさえあれば、自然に出てくるんです。それが投票行動で出るでしょう。それから国民投票で出るでしょう。一般投票、つまり衆議院選挙や参議院選挙では出ませんよ。ありとあらゆる政策をごった煮でやるんですから。

戦争するかしないか、宣戦布告するかしないか、そういう国民投票があったら、気持ちしかないのです。そのときに「する」と投票するか「しない」に投票するか、一人一人の心の良心あるいは良識によって決まる。その一人一人の心の良心・良識を、日本国民はどうやって持つか。そこにかかってくるわけです。

これはかなり、他力本願でなく自分自身の問題になるんです。こういう場合に一番高い比率でやめようと思うのは、戦争の被害を受けた人です。もう1回やろうという人はいないと思います。自分の親族に被害者がいたら、もう一回やってもいいと言う人はいないでしょう。つまり言いたいことは、戦争をやったことがない、被害を受けたこともない、自由で平和な人が「戦争をやってもいいのでは」ということになってしまう。現にそういうふうになってきている。ここが一番危険なんです。

こういうことをやっていくと、今日、皆さんにお願いしたいのは、皆さんにお子さんとか孫とか一族に子どもがいたら、子どものときに植えこまないとダメなんです。子どもさんに是非お願いします。卒業生で小学生のお嬢さんを連れてきている人がいました。是非、そのお嬢ちゃんに頭に入れておいて欲しい。あそこにいる大柄な方の横にいるお嬢ちゃん。よろしくお願いします。学校に行つてね、「お父さんの学校に行つて、こんなことを聞いたよ」と言つて、みんなに話してちょうだい。よろしくお願いします。

\* \* \*

この4項目をどうやってやるか。これを、私は具体的な策を、考えなければならない。

実は今日ね、これを皆さんにお配りする予定だったのです。5月の学会で発表したものですが、これは会話体になっているんです。しゃべったものを、文字起こしというんですが、原稿にします。会話体に起こすと、ものすごく読みづらいですね。これは守屋さんという人がやってくれたそうなんですが、「ええと」とか「プッ」というのが全部入っていて（笑）。「何々する、と」の「と」も入っているんです。全部書き直したんです。書き直したんですけど、会話体そのものは残っています。自分はこういう風に言ったのかなと思うのですが、録音ですから、その通りに起こすと、そうなるんですね。それが全部でA4にすると8枚になっています。

司会者から「あと何分です」という紙が来るんですが、その紙が来る前にできるだけしゃべろうとしてもものすごく早くしゃべるので、8枚になってしまった。この8枚を全部コピーして、綴じて、皆さんに配る予定だったのです。ですが、とてもその労力と体力がなく省略してしまつて、申し訳ないです。

\* \* \*

8月15日を平和の日として、日本の国民の休日に関する法律で明文化して欲しいです。8月15日を法文化する。

なんかいまNHKが8月15日になると、悲しい話ばかり放映していますよね。私はもう悲しい話は聞きたくない、見たくないんです。それよりも、8月15日を一齐に休みにして、もともと旧盆で休みですけど、その日に1時間でも30分でもいいから、渋谷駅の交差点で騒いでいる人たちに考えて欲しいんです。

平和がどうやって続くかということも30分か1時間、考えて欲しい。8月15日に。もちろん、日頃考えてもよいけれど、日頃考えろといっても、誰も考えないんだから、8月15日は考える日。そのために官公庁も民間企業も全部休みにしてもらおう。国民の休日にしてもらおう。これが一つです。

もう一つね、やっぱり考えていかなければいかんというのは、戦争被害に遭った人、国のために駆り出されて死んだ人、怪我した人のことです。この人たちに、もうちょっと報いていくべきだろうと思うんですね。厚生労働省、当時の厚生省に引揚援護局があったのですが、すごく大雑把です。二度と祖国に帰れない遺骨が、東南アジアのいろんなところに散らばっていて、もっと金を出して遺骨収集団を出さなければダメです。

今はあの、今日は忙しく来れないらしいんですが、元航空自衛隊副司令だった人がいます、卒業生に。増田信行さんです。私は最後の勤務地に会いに行きました。福岡県遠賀郡芦屋町に、航空自衛隊があります。なぜ会いに行ったのか。芦屋基地の隣の芦屋町に、私の森田家の墓があるんです。

それが、会いに行ったんです。一等空佐でした。命がけで飛んでいる。実弾を積んで、飛んでいくわけです。話しておきますが、ソ連、今のロシアですけど、なぜソ連がちょっかいを出すのか、皆さん、おわかりでしょう。日本海というのは「日本」の海という字がついている。まずこれを悔しがっている。悔しがっている国が地球上に2つあるんです。北朝鮮とロシアです。北朝鮮は北朝鮮の国名をつけたい。ロシアはロシア海にしたい。でも、あの海の面積は全体でどれくらいか知っていますか。地球上の4分の3は海です。その中の海域面積は3%しかないんです。つまり、あれは池なんです。一番浅いところは236mしかないんです。大和堆というんです。一番深いところで、3,000 m。下は真っ平です。

ところがですね、ある地球物理学者の計算によると、これは上がってくるんです。そして平地になるんです。そうすると、そこは日本の領土になるんです、日本海ですから。ただし、これは70億年かかるんです。待ってられないんです。同じく、ハワイ諸島も日本にくつつくんです。1年間に6m近づいているんです、ハワイ諸島が。天皇海山列島を皆さん、ご存じですか。海底火山の列で、ボツボツボツと、話が飛ぶけれど、帯状疱疹という病気になったことがありますか。あれと同じですよ。バーと点々、点々、点々と。あれがカムチャッカ半島からハワイにずっ

と繋がっていて、ボコン、ボコン、ボコンとマグマが噴きだしてきて、ハワイとつながってくる。

ハワイのマグナケア、すばる望遠鏡、世界でも有数の望遠鏡がある。あのハワイは海底から何mかわかりますか。6800 mにあります。その頭の海面だけがこの辺にあります。その下にズドンと。それが日本に来るんです。現に来たのが、1つある、ご存じですか。

**出席者** 沖ノ島ですか。

**森田先生** いや、もうちょっと大きい。

**出席者** 伊豆半島ですか。

**森田先生** オッ、よくご存じ。伊豆半島です。これがくつついたんです。本当は日本の土地ではないんです。不思議に思うなら、明日でも、明日はまだ休日ですから、伊豆半島に行ってみてください。植生が違いますよ。外国に行ったような錯覚を起こします。そこの土も拾ってみてください。土も違う、植生も違う、植物が違う。あれがくつついたんです。その巨大なやつがインドです、ドカーンと。グイグイ押すから、こっちの土地がめり上がってしまった、8,848 mも。これがヒマラヤです。だから、長い目でみると、地球は動いています。

\* \* \*

最後に怖い話をしますけれど、この動いている地球を狙っているヤツがいるんです。中国でもない、ロシアでも、北朝鮮でもないんです。地球人、民族、それは関係ないんです。それを狙っているヤツ、それは宇宙から来るんです。

昔、私の子どもが科学忍者隊ガッチャマンを見ていたのですが、「そんなものばかり見ていちやダメだよ」と言って、私も一緒に見ていました。その科学忍者隊ガッチャマンでも、防ぎきれないのではないですか。スイスのモンペルランという山の近くに、国連がカネを出して24時間365日、宇宙を監視している組織があります。

一番危ないのは2万8,000 m近くを通過して行った、石ころがあるんです。石ころ。人間の頭くらいの石ころです。秒速20万m、秒速ですよ。20キロ。台風の風は秒速で測りますよね。室戸台風は秒速63 m、これは20キロです。これがぶつかったら、どうなるかわかりますか。化学反応どころではないんです、原子核反応が起きるんです。原子核融合です。

あのその辺に転がっている石で、私は石を集めるのが大好きなんです。私の家に遊びに来てくれた人は知っていると思いますが、私の部屋には石ころが並んでいます。このくらいなんです。もう邪魔ですから、最近、庭に捨てましたけどね。あの石ころから放射能が出ているんです。それこそ24時間365日。私は部屋にそれを並べているんです、50個くらい。そして毎日、放射能を浴びてきましたから、頭がおかしくなりました。それからこんな話ばかりしているんです。

その石ころの半減期は、だいたい30億年か50億年で、石ころ消えますよ。そんな馬鹿な話はあるか。いや、あるんですよ。石ころは消えます。岩も消えます。なくなるんです。結局、放射能を出すんです、自然に。

それと同じことが起こっている。秒速 20 キロで、人間の頭ぐらいのレンガ 1 個ぐらいがぶつかって、大変なことになっている。アメリカのアリゾナ州の砂漠地帯に、直径 1.2 キロ、1.2 m ではなく 1.2 キロの、お椀みたいな穴が開いている。すさまじい隕石がぶつかって。それぐらいの規模の隕石が 10 億年に一回くらいくるんです。小さいのは 1,000 年に一回くらい。チェリヤビンスク隕石というのをご存じですか。ごく最近、落ちまして、ロシアに。地球大気圏に入ったときは直径 45 m くらいあったけれど、落ちたときは 2.5 cm、燃えるからです。

こういうのをどうやって防ぎますか。こういうのが人類の敵ですよ。ウクライナだとロシアだとか北朝鮮だとか、戦争をやっている暇はないんですよ。今もかすめているんです。

今年はずいぶん暑いでしょう。これ、何が原因ですか。誰も責任ないです。太陽です。どんどん燃えているんです。だいたい 1 年間に 0.1 度近く上がっていくわけです。来年 0.1 度上がりますよ。こんな暑さ初めてだと言いますが、それは当たり前で、毎年上がるんです。来年、また上がりますよ。再来年はもっと上がります。10 年で 1 度、上がってごらん下さいよ。人類は生きていけません。

今年、東京都だけで 458 名が熱中症になり、高齢者が死んでいるんです。来年は 600 人くらいになるらしいです。再来年は 1,000 人くらいになるでしょう。私はですね、なんとしてもね、長生きをしようと思っているんです。私が年金をもらい出してから今日まで、まだ 6 年くらいです。年金局の方は、これをどうやって払うか、頭を痛めているんです。

私の年金をもらっているところは 2 か所あるんですけども、1 つは城西大学、私学共済からももらっているんです。その事務局に勤めている方がこのなかにいらっしゃるんです。あとから詳しく話を聞こうと思って、秋山さんと言う方です。今日、いらしています。あと何年もらえるのか。私の計算では、毎月、月給から引かれていました。皆さんもそうでしょう。その 2 分の 1 しかもらっていないんです、もらえないんです。それを取り返すには、私は 108 歳まで生きなければならない。それは無理だから、まあ、せめて 85 歳まで頑張りました。まだまだ足りないです。90 歳でも全然足りない。皆さんもね、1 年でも長生して取り返してください (笑)。

いま皆さん、そうやって笑っていますけれど、年金をもらいだしてごらん下さい。私の言うことがわかりますよ。なぜか。いま皆さん、年金の掛け金の半分は雇用者が払っているんです。だから笑っているけれど、年金をもらうようになると、全部、自分で払うんですよ、たとえば健康保険は全額、自分で払うんです。タダでないんです。しかも今、自民党と公明党は、というよりも厚生労働省は、自民党と公明党は官僚に言われてやっているだけですからね、厚生労働省の年金局は、昔の社会保険庁、今の年金機構は、どうやって高齢者から年金をとるか、減らすかを考えています。ちょうど免許証と同じですね。警察は、私ぐらいの年齢になると、「そろそろ免許返納の時期だけれど、おかげんいかがですか」と来ます。私は意地でも取りに行っています。人を殺すようなことがあったら、私は返納しますが、まだ誰にもぶつけていないし、まだゴールドでやっていますから。

これ、証拠はないんですけどね。取り返すには、そういうことが書いてある。年金でやってい

くのは大変です、お互いに。向こうも大変なんです。おそらく来年あたりから、75歳以上の後期高齢者は、皆さんはまだ75歳以上になっていないでしょう、75歳以上の後期高齢者は、1割負担はなくなります、ほとんど。もう例外的にしか、1割負担になっていない。去年なくしましたよね。1割負担の3分の1くらいが2割負担になりました。あれで病院はがら空きになりました。大病院はいいけれど、開業医はもう泣いていますよ。私のかかりつけの開業医の先生たちは、すごく愛想が良くなった。「こんにちは、お元気ですか」と私がいう前にいってきます。私のかかっているクリニックにかかっている人、いないでしょうね。帰って「こんなこと言っていた」と言われたら、困ってしまいますね。

私みたいな年金者に対しては、どうやってやるか。まず、血液検査をやる。しょっちゅう、血液検査をしているんです。本当にやる必要があるのか。血液検査で血をとられるのは、私はいんですが、前の日、絶食をしなければいけない。それがきついです。着いたときはフラフラですから。その上、血を採る。さらに、その先生は、「こういう薬がある、ああいう薬がある」と、開業医が薬屋さんになる。開業医イコール薬屋です。「ああ、その薬は余っています」と言うと、「ちゃんと飲んでいないんじゃないですか」とくる。「いや、飲んでますよ」、「じゃ、いいです。では、これはどうですか」。つまり、一度「薬をお願いします」と言うと、永久にもらわなければいけない。だから私、薬は袋いっぱい持っています。本当にザックザック。どれを飲めばいいのか、わからなくなってきました。

大学病院も最近、そういう傾向が出てきました。名前は言いませんが、ある病院長が、医科大学の教授の先生方を集めて、「先生方、できるだけ患者の血液検査をお願いしたい、できるだけ薬をたくさん出していただきたい」。まあ、こういうことです。コロナで皆さん、よくわかったでしょう。食べていけないんですよ、病院が。私の知っている大学の医学部も食べていけなくなって、医学部単独では。そこで、文系の授業料の値上げが必要なんです。どこの大学とは言いませんが、どこも皆、そうだろうと思います。

だから、私は城西大学に医学部を開こうと夢見て頑張った時期があるんですが、いま思えば、作らなくてよかったと思います。福祉学部も作ろうとしましたが、これはかなり作ろうとしました。薬学部の新号館、薬学部棟ができたでしょう。4階・5階を福祉学部用に空けてもらったんです。福祉学部をつくるには、文科省の管轄ではないんです、厚生労働省ですが、ものすごく細かい規定があるんです。ここに水道をつくれとか、ものすごく細かい。金がかかる。もう作らなくてよかった、と思います。

元に戻りまして、8月15日は国民の休日として平和を考える日にする。ただ、これだけではダメなんです。それで皆さんは、自分のまちをちょっと思い出してみてください。町役場とか市役所とか区役所とかに行くと、たいてい世界平和とか、核兵器廃止宣言とか、垂れ幕・看板があります。地方議会はやっているんです。やっていないのは中央議会、つまり衆議院・参議院です。だから、是非、中央官庁、霞が関のなかに平和省という省、ノーベル平和賞の平和賞ではないんです、デパートメント、法務省の「省」をつくって欲しいんです。中央官庁としての平和

省。

そうやって平和省をつくれれば、ちょうど環境庁が環境省になったように、防衛庁が防衛省になったように、ああいう風に、省にするんです。各段に違いますから。防衛庁や環境庁は外局ですから、権限が劣るんです。省になれば、単独で予算請求ができます。防衛省、環境省、同じように平和省です。あれだけ原爆を2発くらってひどい目にあったと叫んでいるんですから、平和省くらい作ったっていいんじゃないですか。そのために私は提灯行列をやってもいいと思っている、それくらいの覚悟をしています。さて、結論です。国民の休日の中に入れる。そして省として、平和省をつくる。

3番目はね、できるだけ海外に行つて欲しいんですよ、海外旅行。これはですね、平和省ができたなら、補助金が出せるんです。もちろん運動をしますけれど。海外旅行に行く人には、有無を言わず、一人20万円とか30万円とかを出す。観光旅行でいいです。行った先で、「戦争をやめようよ」と、歩いている人たちに話せばいい。これだけでいい。そういう運動を、中央官庁に省ができたなら、やれるんです。私はやるつもりでいるんです。省をどうやって作るか。地方議会で盛り上げていくしかない。だから私は、地方議会の議員に手紙を出したり、選挙演説に来るときに、話しかけたりしています。

私の家は、ちょうど道路の角にあって、角の隅が切つてあるんです。尖ってなくて、バサッと切つてあって、街宣車を止めやすいんです。角の切つた横に、私の部屋があって、ここで街宣車が、がなるんです。ガンガン聞こえます。「うるさいからやめろ」という訳にはいかない、選挙活動ですからね。出て行って、「質問があるんですけど」と言うと、「是非、そういうことをやりましょう」となるんです。選挙前ですからね。どの人も、「はい、やりましょう」と言いますが、それはウソだと思います。選挙後に行つて、「こういったけれど、どういう運動をなさいますか」と聞くと、イヤな高齢者だと思ふのでしょね。そういう実践をやつて、少しずつ増やしていく。

こういうことを考えています。考えているだけではダメで、実行しなければいけません。皆さん、よろしく願ひします。みなさんの代でやらなくていいんです。皆、忙しいので。隣近所のおじいちゃん、おばあちゃんに一言いってください。この4項目をいっても通じないなら、そのときはね、それを実行して欲しいのです。

\* \* \*

だいたい時間がオーバーしました。やっぱり卒業生はまじめですね。「早くやめろよ」と机を叩く人がいっぱいいました。机を叩かないけれども、もう時間オーバーですから、止めます。ここに書いてあることを、1から4をね、どうか実現して、日本を平和な国にし、息子や娘に譲っていきましょうよ。これが一番大事です。

今日はよく来てくださいました。これを訴えたかったんです。これを訴えて、皆さんが了としてくれたら、私はもうこの世に存在する意義がなくなるんです。皆さん、元気で生き抜いてくだ

さい。

今日、ほとんどの人は顔がわかりますが、わからない人も2~3人いました。「失礼ですが、どちらさんですか」と聞きました。よく顔を見て話をしていたら、だんだんわかってきました。本当に、よく来てくれましたね。こんなに来てくれると思わなかったです。これを見ると、私はそれほど恨まれてなかったんですね（笑）。

そう良くもなかったけれど、私の拙い話を現役時代に聞いてくださって、またこの暑い連休の中をここまで来てくださって、私は涙が出るくらい嬉しいです。これはオーバーではないです。

どうか皆さん、長生きして年金を！ ありがとうございます。（盛大な拍手）

司会者 ありがとうございます<sup>(2)</sup>。

《注》

- (1) 最終講義の前に物故者追悼式が執り行われました。森田先生の号令のもと、出席者全員がかつての同志に1分間の黙祷をし、その御霊に敬礼を捧げました。その後、本講義に至る経緯が説明されています。
- (2) 本講義の後、質疑応答が続きました。